

妙岐ノ鼻ヨシ焼き再開 2年目の新たな取組み

三野 剛司¹

¹関東地方整備局 霞ヶ浦河川事務所 湖沼環境課 (〒311-2424 茨城県潮来市潮来3510)

ヨシ焼きは、植物（貴重種を含む）の成長促進や病虫害の駆除、樹林化の防止に役立つとされている。霞ヶ浦妙岐ノ鼻（茨城県稲敷市浮島地先）は多様な生物が生息する貴重な河川環境であり、これを保全するために、河川管理行為として平成31年3月より14年ぶりに再開し実施している。

当該地は、霞ヶ浦開発事業に伴い独立行政法人水資源機構（当時は水資源開発公団）が購入した土地であり、植生や鳥類の調査を行っており、カモノハシ群落が増加していることからヨシ焼きや刈り取りなど対策を進めたい意向があった。令和元年度からはともに主催者となり、1年目の反省を踏まえヨシ焼きの実施に向け準備を進めてきた。

しかし、開催目前（令和2年2月26日）に新型コロナウイルス感染症への対策の基本方針の決定を受けて、ヨシ焼き関係者や見学者への感染拡大防止のため、翌日に中止と判断した。

ここでは、2年目の新たな取組みと中止判断後の対応について報告する。

キーワード ヨシ焼き、生態系保全、貴重種保全、伝統文化継承

1. はじめに

「妙岐ノ鼻」は、霞ヶ浦（西浦）の南に位置し、面積約50haを有する霞ヶ浦最大の湿原である（図-1、写真-1）
妙岐ノ鼻には、ヨシを主体とする湿性植物群落分布



図-1 位置図



写真-1 妙岐ノ鼻 全景

し、環境庁（現環境省）による第2回自然環境保全調査（昭和53年度）では、「郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの」として、特定植物群落に選定されている。ヨシ原には、さまざまな鳥類も生息し、オオセッカ（絶滅危惧IB類）の越冬地、繁殖地として重要な場所であり、コジュリ（絶滅危惧II類）の繁殖も確認され、チュウヒ（絶滅危惧IB類）のねぐら入も見られる。

一方、妙岐ノ鼻は古くから萱の採草が行われ、現在も刈り取られた萱は日本三名園の一つである水戸の偕楽園にある好文亭の萱葺き屋根にも使用（写真-2）されるなど、とても品質の高い萱が採れる貴重な場所となっている。

妙岐ノ鼻のヨシ焼きは、「ヤーラモシ」（野原燃し）と呼ばれ、少なくとも1955年以前から毎年行われてきたが、環境問題等の社会情勢等から2005年以降は行われていなかった。¹⁾

しかし、多様な生物が生息する貴重な河川環境の保全を目的に河川管理行為として平成31年3月に国交省が再開した。今年度は、土地所有者である独立行政法人水資源機構とともに2年目の開催に向け準備を進めた。

2. 湿地環境の保全と伝統文化の継承

妙岐ノ鼻には、ヨシ、カモノハシ（図-2）²⁾、カサ

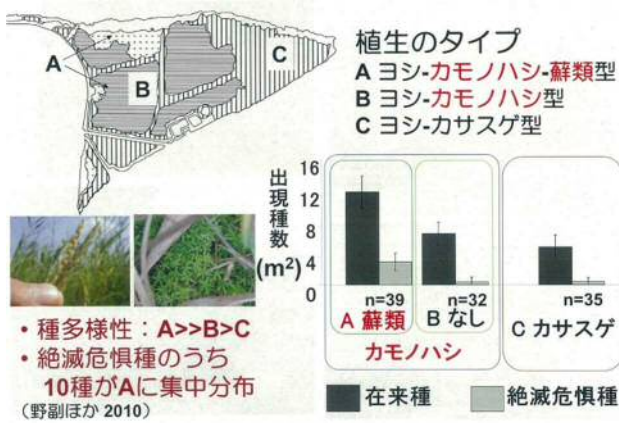


図-2 植生分布

スゲを主体とする霞ヶ浦最大の湿地植物群落 distributes, 約300種以上の植物が生育している。

妙岐ノ鼻で「萱」と呼ばれるカモノハシは、イネ科カモノハシ属の多年草で高さ30cmから70cmである。地域的に絶滅が危惧されている。河川水辺の国勢調査における霞ヶ浦周辺での重要調査地点13箇所の中でカモノハシが確認されているのは妙岐ノ鼻のみである。

妙岐ノ鼻では、昔から萱の採草が行われているが採草を行っているのは、浮島地区(旧浮島村)の住民である。萱葺き屋根の減少に伴い、自家消費的な萱の利用は徐々に減少したが一方で萱葺き職人は文化財関係(写真-2)の需要があることから現在も萱刈りを行っている。



写真-2 好文亭



写真-3 カモノハシを主体とした「しまがや」

採草は、カモノハシやヨシがその対象であり、「しまがや」(写真-3)と呼ばれ、品質が高い。刈り残しを燃やす野焼きは、地元では「ヤーラモシ」(野原燃し)と呼ばれて、2005年(平成17年)まで実施されていた。

萱を刈る萱師からの話では、「ヤーラモシ」を行わないと、古いヨシと混じり商品価値が低くなるという。

このことから「ヤーラモシ」は妙岐ノ鼻に生育するカモノハシやヨシの量や質を維持するために行われていたことが分かる。

そのため、浮島地区に萱葺き屋根の家が多かった頃、「ヤーラモシ」は住民の生活を支えるという意味合いが強かった。

また、刈り取らないものや、刈っても搬出しないもの

は全て焼き払う習慣となっていた。¹⁾

3. ヨシ焼きの必要性と効果

(1) カモノハシ群落の減少

妙岐ノ鼻では近年カモノハシ群落の減少傾向が確認されている(図-3)。³⁾

これは、ヨシ焼が行われていない影響も拍車をかけていると想定される。

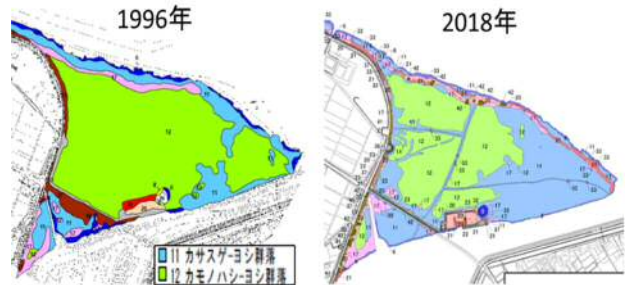


図-3 植生の変化

(2) ヨシ焼きによるカモノハシ成長の効果

ヨシ焼きは、植物の生育促進、害虫駆除、樹林化抑制などの効果があるが、学識者による現地実験の結果、カモノハシの成長に対しても効果が確認されている(図-4)。⁵⁾

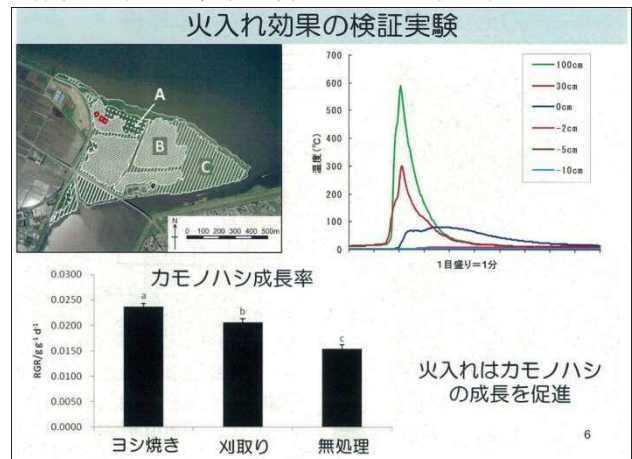


図-4 ヨシ焼き後のカモノハシの成長速度

妙岐ノ鼻の植生についてこれ以上の質の低下や減少を抑制し、保全するためには、ヨシ焼きは必要であり、重要な手段の一つであると言える。

以上のことから、昨年度(平成 30 年度)よりヨシ焼きを部分的に再開した。

昨年度のヨシ焼き部分は、再開して 1 年目ということもあり大きな変化は見られなっていない。(図-5)⁶⁾

4. ヨシ焼き継続の課題に対応した実施内容と工夫した点

(1) 1年目の課題

1年目のヨシ焼き実施後、関係機関に「事前準備」、

カモノハシ-ヨシ群落の変化について

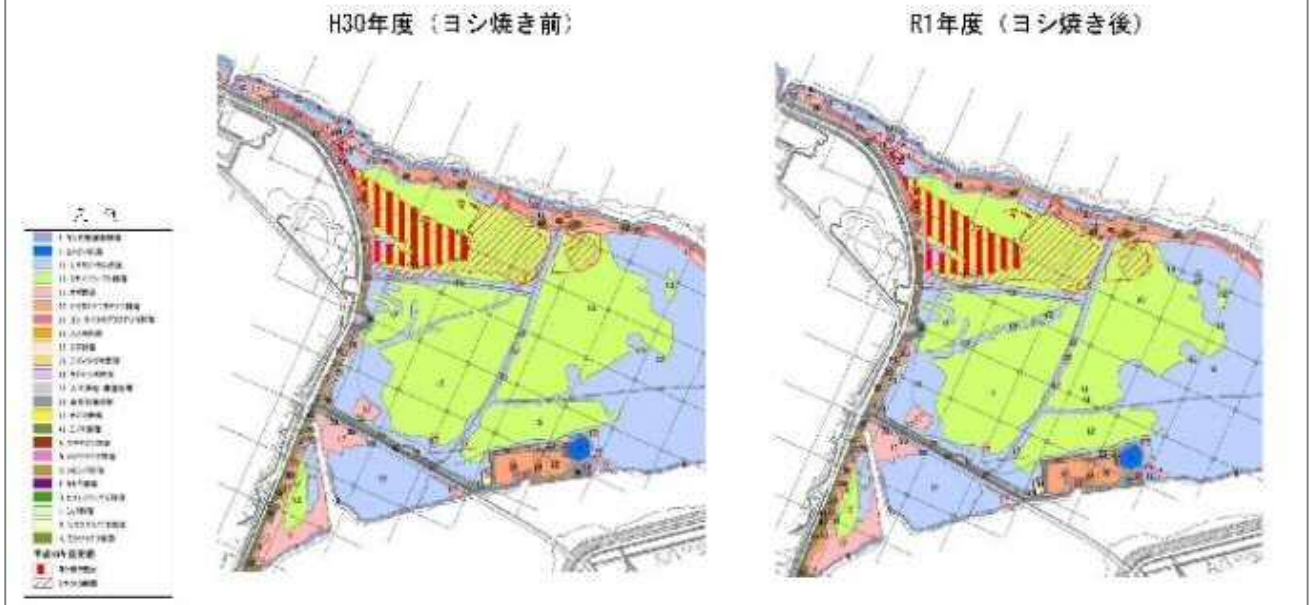


図-5 カモノハシ-ヨシ群落の変化図

「当時の実施内容」、「次年度のヨシ焼き規模」などのアンケートを行っており、2年目としてはその結果に留意し進めた。

ヨシ焼きにあたっては、地元消防署・警察署及び関係機関の協力を得て安全確保に努め実施する必要があり、当日は火災と間違われない事や周辺地域の生活（降灰による洗濯物等）への影響を軽減する為、広報に努めることが重要であり、2年目は早い時期から関係者〔①稲敷市、②茨城県、③学識者、④専門家（萱葺き文化協会）〕を集め、実施方法、段取りなどの確認を行った。（写真-4）



写真-4 関係者会議状況

さらに関係者会議では、1年目の反省を踏まえた2年目の計画（案）の意見交換を行うとともに専門家からヨシ焼きに対する意識高揚に努めるため、「湿原（妙岐ノ鼻）の植生とその管理」（写真-5）についての説明をいただいた後に、全員で現地状況（写真-6）の確認を行った。



写真-5 学識者等の説明



写真-6 現地の確認状況

(2) 2年目の実施に向けて準備

1年目のヨシ焼き実施後のアンケート結果から下記事項を反映し準備を行った。

①ヨシ焼き範囲を拡大

H30年度は青色枠内の約2.7haであったが、令和元年度は赤色枠内も含め約5.0haと拡大した計画とした。（写真-7）



写真-7 ヨシ焼き計画範囲

範囲の拡大にあたっては、昨年度同様に地元萱刈り職人が刈り取りした範囲と萱の搬出に使用している通路を

防火帯として活用することとした。

②見学者等への対応

見学者等に配慮し、駐車スペースと誘導員の配置、受付、パンフレットによる広報スペースを設けるよう計画準備した。

5. ヨシ焼き中止の対応

(1) 関係者等への周知

開催目前の前々日（令和2年2月27日）には、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止する判断を下した。既に記者発表を行い、一部新聞社において記事掲載がなされていたため、関係機関への電話、メールによる連絡を行うとともに主催者ホームページへも中止の掲載を行った。

各記者クラブへは、FAXにより通知を行い、翌日に電話にて確認を行った。また、直接記者クラブへお知らせ文書の投げ込みが必要であった所もありその対応に追われた。

(2) 現地対応（ヨシ焼き予定当日）

ヨシ焼き実施予定日は、中止を知らずに見学に来てしまった方のために職員が現地にて、周知が行き届かない方への対応を行った。

当日は、中止を知らなかった等で20名ほどの方が訪れた。ヨシ焼や霞ヶ浦の自然に関する資料などを配布し、新型コロナウイルス感染対策としての中止の経緯を説明したため苦情などはなかった。

6. 課題、反省点、今後の取り組み

次年度（令和2年度）の実施に向けて、水資源機構と課題や反省点を確認した。

(1) 次年度の実施時期

・ヨシ焼きは、2月末から3月上旬に実施日を設定したが、霞ヶ浦の水位運用により水位が高く、事前準備の防火帯を設けるための草刈りでは作業効率が悪く、また、ヨシが焼けるか心配でもあった。

次年度の実施時期は、霞ヶ浦の水位運用による水位低下時期を鑑み3月下旬を目安に再検討を行っていく事とした。

(2) 実施主体の体制見直し

・元々は、妙岐ノ鼻に生育するカモノハシやヨシの量や質を維持するために地元が主体で行われていた。このことから地元が携わり継続的に実施できる手段として、「協議会」等を立ち上げ実施する仕組みが必要ではないかと考えられる。

次年度の準備に向けて、検討する必要があると感じた。

参考文献

- 1) 植松 拓理：ひとと自然のかかわりからみた霞ヶ浦・妙岐の鼻の生態系保全 (2007)
- 2) 野副ほか：霞ヶ浦湖岸「妙岐の鼻湿原」における植物の種多様性指標としてのカモノハシ (2010)
- 3) (独)水資源機構利根川下流総合管理所：妙岐の鼻他環境調査業務 (2019.3)
- 4) Wang ほか：Effects of traditional vegetation usage and management on the growth of facilitator keystone species in a moist tall grassland (2015)
- 5) 西廣 淳：霞ヶ浦・浮島湿原(妙岐の鼻)の植生とその管理 (2019)
- 6) (独)水資源機構利根川下流総合管理所 提供(2020.3)